

シドニーとメアリ・ロウス研究への一視角

——〈中心〉から〈周縁〉へ——

英語英米文学科教授 村里 好俊

三二歳に満たないでオランダ戦線で戦死したシドニーの人生は周囲の者たちの期待に沿えない儂いものであったが、しかし、エリザベス女王と権力の中枢にいた廷臣たちには、それを利用する企みが存在した。シドニーは宮廷政治の狭間にあつて、高貴な家柄に生まれたがゆえに大きな期待を背負わされ、そのことを自覚しながらも自らの持つて生まれた資質のため、そして宮廷政治においては、老練の政治家たちによって、何らかの国事に携わる権力を与えられず、単に宮廷の装飾的花形として、いわば飼い殺しにされて、政治家・宮廷人・外交官・軍人として日の当たる表向きの世界では、結局、周囲の期待に背く結果となった。

シドニーが学んだシュルズベリの文法学校では、聡明な校長トマス・アシュトンの先導により、宗教と古典とが重要視され、作家であり政治家であること、そして〈行動の人生〉と〈観想の人生〉とを組み合わせ、国家にとつて有用の人物になることが力説された。宮廷から遠ざけられ、政治家としての〈行動の人生〉をまっとう出来ないという

苦悶の中で、実妹メアリの嫁ぎ先であるペンブルック伯爵家のウィルトン屋敷で〈観想の人生〉を送りながらも、文学という虚構の中に、理想とする〈行動の人生〉を作り出そうとしたシドニーは、目の前の直視したくない現実から離れて、虚構の詩文の中に、自らの理想とする世界を構築することを目指したのであった。

シドニーは自らの政治家としての経歴は失敗に終わったと考えたと察せられる。高い、高すぎる目標を掲げて、職務を果そうと野心を燃やしたが、それを達成できなかつた。ただ、皮肉なことに、彼の戦死だけが彼が常に抱き続けた国家にとつて有用でありたいという有為の志を果すのに一役買う結果となった。シドニーの葬儀は、その費用の大半は岳父ウォルシンガムが立て替えたのだが、国葬として国家的統一と国家的企図を明確に表す壮大な見世物に変貌したからである。その成果は、ある意味で、翌年のスペイン無敵艦隊撃破という国の命運を左右する国家的事件となつて、間接的には結実することになった。

シドニーはエリザベスが差配するロンドンの宮廷という中心から、妹メアリの田舎屋敷が位置するウィルトンへと移動し、政治という現実から虚構作品という仮想世界へ移動して、脱宮廷を実行し、〈観想の人生〉を送りながら独創的な作品を産み出し、その中で〈行動の人生〉を描出した。そして、彼の代表作『アーケイディア』の舞台は、奇

しくも、当時のヨーロッパの主要な国々からみれば、ギリシャ、小アジア諸国という周縁地域に当たる。

女王の不興を買い政治的要職には就かせてもらえず、いわば干された生活を強いられたことは、国家にとつて有用なる者を目指したシドニーにとって憤懣やる方なかつたであろう。そして、そのような鬱屈した状況のなか、シドニーは妹ペンブルック伯令夫人のウィルトン屋敷で悶々として、当初の直線的語り物の散文ロマンス『オールド・アーケイディア』を、散文で書かれてはいるが、主筋の装飾的意匠として多数の歌が織り込まれ、複雑な構成を備えた、ホメロスやウエルギリウスの叙事詩に匹敵すると言つて過言ではない、英雄叙事詩『ニュー・アーケイディア』へと書き直していたのである。

それに加えて、現代の文学批評でしばしば話題となる「語り」という観点からも、『ニュー・アーケイディア』は画期的な語りの技法を構築した作品だと言える。この作品で構築された「同心円構造の語りの技法」と「多元構造の語りの技法」は、近現代小説のナラティヴの原型であり、それを先取りしているのではないか。バフチン流に言えば「多声的小説」とも言えるこの作品では、複数の語りが集まって大きな枠組みの物語を形成していき、事情が次第に明確になっていく。一方で、近現代小説の場合には、小さな語りが集まっても、所詮、それらはばらばらな破片にしか過

ぎず、明晰な全体像を結ばないことが意図される。語りの技法という観点からしても、『ニュー・アーケイディア』は極めて意識的に技巧を凝らしたもので、それは遠く現代にまで通じている。

シドニーの文学的盟友とされる大詩人スペンサーは、中央政府派遣の地方役人、書記官としてアイルランドという当時の辺境に否応なく住み、その土地の豪族の反抗で何度も辛酸をなめながら、絶えず中央であるロンドンを、その中心にあるエリザベス女王治下の宮廷を希求し続け、妖精女王グロリアナにエリザベス女王を擬して、飽く事なく女王賛歌を歌い綴つた。辺境の地アイルランドの無秩序からロンドンの宮廷の秩序を志向し、安定した中心を希求する求心的作品を書いたと思われる。

一方、高貴な家柄の御曹司として国家に有用な行動の人としての将来を期待され、政治と文化の中心にいなから、あるいは、いるはずであるのに、女王から疎まれて宮廷から遠ざからざるを得なかつたシドニーは、スペンサーとは逆の道筋、即ち、中心から辺境への行路を辿ることになった。シドニーは、例えば、フランシス・ドレイクと行動を共にして、新大陸開拓への彼の野心に見られるように、絶えず中央から外の周縁へと遠心的拡散的に向かつた。その計画は、結果的には破綻をきたし、出発直前に女王から待つ

たがかかつて急遽、叔父レスター伯配下の武将としてオランダ戦線に赴くことになり、ズットフェン近郊でのスペイン軍との戦闘で、流れ弾の破片を太腿に受け、その傷が化膿してアルンハムという異国の町、ロンドンから見れば周縁の地で（友人グレイヴィルの記録に拠れば、歌を歌いながら）、永眠することになった。

シドニーの代表作『ニュー・アーケイディア』は、ギリシャのペロポネソス半島内陸部の山がちの国、古代ローマの詩人ウエルギリウスによって理想郷と歌われた「アルカディア」が主要な舞台であり、その国のさらに奥深い内部の森の中に大公バシリオス一家は隠棲しているし、大公の厳命により、選ばれた羊飼たちしか出入り出来ないこと定められているので、他国のよそ者が絶対に侵入不可能な閉じられた空間という印象を与えるが、愛息アムフィアロスを王位に就けようと画策する姦婦セクロピアの策謀で、彼女の忠実な家来クリオスに唆された暴徒の群れが簡単に侵入するし、また、現に、異国の二人の王子たちがこの国の二人の王女に求愛するために羊飼とアマゾン女戦士に変装して、大公一家の傍近くに住んで奉仕している。シドニーは、不安定な内部が異質な外部の侵入の危機に晒されるアルカディアを、嚴重に囲われ守られた理想的庭園のイメージからは程遠い国として描いた。

このように、イギリス・ルネサンス期の二大詩人シドニー

とスペンサーの代表作『ニュー・アーケイディア』と『妖精の女王』との距離は、いわば、「求心」と「拡散」、「中央へ」と「周縁へ」という、相反する二つのベクトルに求められると言つて過言ではないと思われる。

シドニーの姪レディ・メアリ・ロウスは、叔父シドニーの文学的名声を誇りとし、シドニーが残した主要な三つの文学ジャンル、詩集、ロマンス作品、牧歌劇を女性の視点から書き直した作品を書いている。ロウスは、『パンフィリアからアンフィランサスへ』、『モンゴメリー伯令夫人のユレイニア』、『愛神の勝利』という三作品を、家父長制が跋扈する社会における女性という周縁的な立場から、しかし、男性詩人たちの立場を引つ繰り返し、独自の女性的な視点からの観察に基づいて、裏返的に書き綴った。

一二世紀南仏で生まれた新しい「精美の愛」を声高に歌ったのは、トゥルバドゥールと呼ばれる叙情詩人たちであった。愛の喜び、愛による人格の向上、「愛の宗教」を唱え、女性崇拜の歌を書いた。女性を至福の源とし、憧憬と崇拜の念を抱いて、意中の既婚の貴婦人に奉仕する喜びを歌う彼らの「至純の愛」は、パリを中心とする北フランスの叙情詩人たちに受け継がれていっそう倫理的に規範化されただけでなく、南下してイタリヤへ向かい、ガイド・カバルカンティーを始めとする「清新体 *Dolce Stil Nuovo*」の詩

人たちを經由して、一三世紀後半のダンテ、一四世紀のペトルカやボツカチオに大きな影響を与えた。

司祭アンドレアス・カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』¹で規定された「恋愛の三ヶ条」によって、君主に臣下が奉仕するように、淑女に恋する男（騎士）が奉仕するといふ（騎士道的恋愛の構図）がここに成立することになったが、この構図を基盤にして、愛する女性にひたすら愛を捧げ、それを様々な詩的技法を凝らして歌った詩人の代表が、イタリアのダンテとペトルカである。ダンテ（一二六五～一三二一）にとつて永遠の女性であるベアトリーチェは、若きダンテの内面派の抒情詩集『新生』（一二九二年）に生き生きと、美しくもまた優しく歌われている。『新生』に書き加えられたダンテ自注の詞書に依ると、彼女とほとんど年齢が同じダンテは、九歳で彼女を見染め、一八歳の時に再会して恋心に燃えたという。しかし、ベアトリーチェはシモーネ・デ・パルディに嫁して、一二九〇年に二五歳の若さで身罷つてしまう。ダンテにとつては、現実には、永遠に手の届かない女性になってしまったのである。しかし、ダンテは決して手に入らない女

性に対する思慕の念を恋愛詩に歌い、『神曲』では、ダンテが尊敬する古代ローマの詩人ウエリギリウスに導かれて「地獄」、「煉獄」を経廻つたのち、彼に代わつて、永遠の存在であるベアトリーチェが天国でのダンテの道案内をすることになる。

フランチェスコ・ペトルカ（一三〇四～七四）の代表作『カンツォニエーレ』全三六六歌（内、ソネットは三一七篇）は、ダンテにとつてのベアトリーチェのように、彼にとつての永遠の女性であるラウラに捧げられた抒情詩集である。ペトルカがラウラと出会つたのは、一三二七年四月六日、アヴィニヨンの聖女キアラ（クレール）教会においてであった。彼女は他の男性に嫁いだが、それから二一年の歳月を経た、一三四八年五月、イタリアのパルマに滞在していたペトルカは、友人からの知らせで、ラウラが当時大流行していたペストに罹つて落命したとの知らせを受けた。この訃報を受けた後に彼が書きとめたメモから、ラウラの死の衝撃が彼にとつていかに大きかったかを読み取ることができる。

重要なことは、ダンテのベアトリーチェへの恋愛詩も、ペトルカのラウラへの恋愛詩も、あの世へと旅立つてしまふ、現世では二度と再び相まみえることのない女性に対して、切々と連綿として恋心を歌っていることである。こうして、中世後期から近代初期にかけて文化の先進国イタ

1 アンドレアス・カペルラヌス、野島秀勝訳、『宮廷風恋愛の技術』、法政大学出版局、一九九〇年を参照。

2 ダンテ、山川丙三郎訳、『新生』、岩波文庫、岩波書店、（一九四八年）、二〇〇八年。

リアに現われた二大詩人の手になる恋愛詩、とりわけ、ペトルルカが書いた詩集の影響力の大きさをゆえに、へ決して叶えられない愛」こそが、その後の西欧恋愛詩の基本を形成することになっていく。

一六世紀後半イングランドの詩人たちは挙ってペトルルカ風の恋愛ソネット詩集を陸続と書き始めることになる。彼らの詩には多種多様な詩的技巧の変奏は見られるが、絶対に叶えられない愛を切々と歌い続けるという点では、得恋を予想させる終り方をするスペンサーの『アモレットイ』を例外として、すべての詩人たちの詩集が一致している。少なくとも、全く毛色の違ったシェイクスピアの『ソネット集』が現われるまでは。イングランドで一五九〇年代の連作ソネット詩集大流行の先鞭を付けたシドニーの『アストロフィルとステラ』は、一目惚れの伝統を破り、恋人の目を黒い瞳に描いているし、純愛ではなく、情熱に身を委ねようとする詩人・語り手の欲望が前面に顔を出す、その他の点では、人妻への叶わぬ恋という、ペトルルカ風の伝統の下で様々な変奏を加えながら書かれている。

しかし、様々な変奏が加えられていくうちに、あまりに詩的表現に凝り過ぎて、詩の中に遊び的な、持つて廻った技巧的要素が頻出するようになり、擬似恋愛詩の様相を呈するようになっていく。恋愛詩集を物した詩人たちの愛の対象である女性自身が、ドレイトンの『アイデア』の場合の

ように、生身の女性から反転して、女性の美の化身としての「アイデア」に変貌するまでになるが、この趣向こそ、まさに、「決して手の届かない女性像」の典型とも言えるであろう。

メアリ・ロウスは、ペトルルカ風の恋愛の主題・歌い方を転覆させ、シドニー作品との類似にもかかわらず、叔父とは決定的に異質の音色を奏でる物語を紡ぎ出した。当時の恋愛詩や恋愛ロマンスの慣例に倣って、純な心、若々しさ、高邁な理想、高潔な道徳、大きな期待に満ちた時代を基盤として主題を展開させるのでなく、幻滅、沈滞、憂鬱、敗北、悔恨、悲嘆の渦巻く時代を探求しようとするロウスは、「辛辣な風刺の詩神」に詩的狂熱を授けられ、ひび割れ、裏切られ、嫉妬に狂った愛を描出する。ロウスの語りの戦略は、女性の視点から性差、社会、文化の相互関係を再・提示して、従来の文学的慣習にメスを入れ、これを改変することにあつたと思われる。

メアリ・ロウスの生き様と諸作品は、性差と性の政治学の歴史を検分するのに申し分のない材料となる。彼女の経歴は、ジェイムズ朝初期、社会全般に亘って男性中心主義がますます普及・強化されつつあつた圧倒的な父権制社会

3 ジェイムズ一世は、一六〇三年、イングランドとスコットランドの統合を鼓吹する上院議会での演説の中で、「朕は夫であり、全島は朕の正式の妻である」と述べ、たびたび自らを国民の父になぞらえて、家父長権的政治支配の強化・定着を図つたとされる (Leonard

の枠組の中で、精神形成期を過ごし、何らかの意味で主体的な媒介者の役割を担うことを決意した女性が直面することになる、限界と可能性の典型的な一例を提供している。

男性優位社会・文化の中で、彼女はある意味では犠牲者であるが、別の意味では、反逆的女性として、女のセクシュアリティを、女性に対して抑圧的な社会・文化のシステムを問い直す武器として活用し、存分に女性性を生きた数少ない女性の一人と言えなくはない。文化人類学者の山口昌

男流儀に言い直すと、エントロピーの負荷を荷重された、父権制の秩序を惑乱する存在にして、排除の対象としての女性。にもかかわらず、いわば周縁性を充電した女性たちは、曖昧であるがゆえに多義性を孕み、社会の可能性を高める媒体になることがあると言える。ジェイムズ朝演劇には、有徴性を帯びた女性、すなわち、結婚相手の選択に関して人種の境界を越え、父権制度と社会通念に挑戦するデズデモーナ、女王であるからこそなおさらローマの男性優

Tennenhause, *Power on Display: The Politics of Shakespeare's Genres*, New York: Methuen, 1986, p. 149)。そこでは、絶対君主としての「莊重な資格を帯びた人物をとりまく、象徴や強大な特権をめぐる焦点化」としての政治という現象が展開しつつあったのである(山口昌男、「政治の象徴人類学へ向けて」、『文化の詩学 二』、岩波書店、一九八三年、三頁。

4 山口昌男、「スケープゴートの詩学へ」、前掲書、一〇一〜一三五頁を参照。

位の社会秩序とジェンダー意識を脅かす、《他者》の典型としてのエジプト女王クレオパトラ、階級の境界を越える性的逸脱の行為を通して舞台を支配する、ジョン・ウエブスターのモルフィ侯爵夫人と白魔ウィットリアなど、何人かの反体制的な女性が登場するが、メアリ・ロウスは明らかに彼女たちと共通の精神風土に育っていたのではないかと思われる。

このようにして、シドニーが寄って立つ根拠として案出した〈周縁〉という立場は、女性として否応なく社会の周縁に立たざるを得なかった姪のメアリ・ロウスによって、シドニーを初めとする男性性詩人たちの書き直しという形で実現されることになったというのが、私の主張である。

* * *

メアリ・ロウスがイギリス文学史上最初期の自覚的女性詩人として注目されるようになったのは、一九八〇年代になつてのことなので、日本ではまだ研究等があまり進んでいないことを考慮して、以下に紹介を兼ねて、略伝を記すことにする。

Lady Mary Wroth 略伝

レディ・メアリ・ロウスは恐らく一五八七年一〇月一日に、ロバート・シドニー(後のライル子爵及びレスター

伯爵)とバーバラ(旧姓ガミッジ)の長姉として、呱呱の声を上げた(メアリの出生年月日については一五八六年一〇月一八日とする説があるが、これに従えば、伯父フィリップ戦没の翌日に生まれたことになる)。彼女の祖父、サー・ヘンリー・シドニーは、忠実なプロテスタントの行政官としてエリザベス女王に仕え、ウエールズやアイルランドの総督代理を勤めた。彼女の伯父、サー・フィリップ・シドニーについては多言を要すまい。伯母メアリは、ペンブルック伯令夫人として有名な文学的パトロンのであり、自ら『聖歌』や他の著作の翻訳者で、シェイクスピアの最初の全集(第一フォリオ版)が献呈された三代目ペンブルック伯爵の実母であった。彼女の父は主として宮廷人として政府の役人として精力的に活躍したが、詩も書いた。彼女の母は文学を篤く庇護した。レディ・メアリ・ロウスが自ら出版に踏み切った作品『モンゴメリ伯令夫人のユレイニア』の題扉には、彼女の卓越した文化的家系的系譜が華々しく掲げられている。「正しく高貴なレスター伯爵ロバートの息女にして、永久に著名な誉れ高い騎士、サー・フィリップ・シドニーと、先頃逝去されたこの上なく卓越したペンブルック伯令夫人メアリの姪」であると。

僅かにオランダ戦線を歴戦中の父の許を訪れたり、ペンブルック伯爵のロンドン屋敷に家族で滞在したりするほかは、子供時代のほとんどを生まれ育ったペンズハースト邸

で過ごしたメアリが、(後にベン・ジョンソンが述べた言葉を用いれば)「嫉妬深い夫」サー・ロバート・ロウスと「不釣り合いな結婚」をしたのは、一六〇四年九月二七日のことであった。夫はメアリの十歳年上、裕福な地主の長男で、(ジョンソン作「ロバート・ロウス卿に寄せて」で歌われているように)国王ジェームズ一世に絶好の狩猟場を提供する所領地を相続した。

結婚期間中、メアリは多くの時間をロンドンのペンブルック屋敷や宮廷で過ごし、宮廷では王妃アン御付きの女官の一人になったが、夫ロバートは華やかな宮廷生活よりは田舎滞在と狩猟を好んだという。メアリはジョンソン作の宮廷仮面劇二本に出演している。一本は、一六〇五年(シェイクスピアの『オセロ』が宮廷で上演されて直後)の『黒の仮面劇』で、「黒人の娘」役として「顔を黒く塗って」出演した。もう一本は、三年後の『美の仮面劇』である。シドニー家やペンブルック家に絶えず出入りしていたジョンソンとメアリとは、かなり親しい関係にあったように、ジョンソンは一六一〇年の劇作『錬金術師』をメアリに献じ、メアリやメアリの詩作について御世辞の歌を作っている。夫との間に初めて生まれた子供はジェームズ、一六一四年のこと。しかし、その僅か一ヶ月後、夫が亡くなり、メアリに残されたのは、年一、二〇〇ポンドの寡婦金、生後ひと月の幼児、そして二二、〇〇〇ポンドの借財

であった。彼女は自分でその事態に対処しようとしたが、息子が一六一六年六月に亡くなり、その所領地は夫の弟の手に渡り、彼女の元にあるのは、積もる借金の山ばかり。メアリは一六二四年までに借金の半分を返済したと主張したが、一生涯経済的困難から解放されることはなかった。

寡婦生活の初めの頃は、経済的困窮ばかりに拘わっていたのではない。恐らく夫が亡くなる前に始まったと覚していた従兄ウィリアムとの不倫は、夫の没後ではあるが、二人の私生児ウィリアムとキャサリンを産み落とすまでに発展した。ウィリアムは彼女より少し前に結婚し、精力的宮廷人として宮廷馬上槍試合や政治問題に積極的に拘わり、宮廷夫人たちの寵児であり、ジョンソンのパトロンでかつまた自らいっばしの詩人を気取った若い伯爵であった。二人の不倫関係がどれだけ続いたのかは、不明である。

二人の關係は言わば公然の秘密で、シドニー、ペンブルック両家で明白に認められていたようだ。そのような不義密通は稀ではなく、あからさまにはないにしても、ジェームズ一世時代の宮廷ではしばしば寛恕された。それにしても、メアリが宮廷内で不興を蒙ったのは、この事が原因なのか、あるいは一六二一年に『ユレイニア』を出版したことが原因なのか。『ユレイニア』は彼女の友人で、ペンブルック伯の義妹、モントゴメリ伯令夫人スーザンに献呈されたが、メアリに出版の意図があったのかどうか定かではない

(たとえ出版しても金など入って来なかったであろう)。題扉は華麗だが、献辞の詩も序文めいた言葉もないのは、常ならぬことである。バッキンガム公爵へ宛てた彼女の積明では、彼女の書き物は「端からわたくしの意志に反して売られました。わたくしにはそれらを出版する意図など全くありませんでした」。もともと、メアリは既にバツキングラム公に一部進呈してはいたが。

メアリは原稿料を当て込んでいたが、出版して六カ月後、デニー卿その他から、彼らの私生活をあからさまに描写しているとして、強烈な横槍が入り、作品を回収せざるを得なくなる。当該作品には、このジャンルの作品の例に漏れず、波瀾万丈の出来事が氾濫している。冒頭二〇ページ程まで読むと、女羊飼ユレイニアがナポリ王国の後継者、アンフィランサスの、杏として行方の知れなかった妹であることが分かる。残りの五〇〇頁余りには、戦闘場面(しばしば付き添っている女性の眼から観察したもの)、魔術、不義・背信(伯父シドニーの『アーケイディア』よりも結婚に関心を向けている)、変装、裏切、隠れ家、パンプフィリアの過度な忠義・忠節などが一杯詰まっている。物語の展開は幻滅感に染まり、対話は妙に迫真的である。未完の第二部では、登場人物たちが頹廢・凋落している。牧歌劇『愛神の勝利』*Loves Victorie*の様々な韻律的趣向を凝らした詩は、明らかに作者自身の恋愛事件をネタにした

内容で、宮仕えの恋人は恋の苦悶に胸かきむしるが、真実の愛を貫いて、結局は嫉妬を克服しようとする。

メアリは因習的に女性に期待されていることを、非宗教的な著作を物することで、またそれを出版することで、裏切ってしまった。さらに悪いことには、『ユレイニア』には宮廷で実際にあった出来事や実在の人物を明らかに元にして書かれた挿話や登場人物を含んでいた。その事が猛烈なスキャンダルを引き起こし、メアリはその著作物を回収することを余儀なくされ、次第に宮廷からの退去へと追い込まれることになった。その後、メアリの名は大方の記録から消えてしまうが、恐らく、自らの楽しみのために著作活動は続けたらしく、それが『ユレイニア』第二部や牧歌劇『愛神の勝利』に結実した。亡くなったのは、一六五三年のことと思われる。

これら人生の断片的記録から浮かび上がるメアリ像は、自らに与えられた人生を力強く生き抜いた一人の確固たる女性のそれである。幼年時代を閑静なペンズハースト邸と父の赴任地であった風雲逆巻くオランダの両方で過ごし、シドニー家の遺産伝統へのしたたかな矜持を骨の髄まで注ぎ込まれたメアリは、詩人として文芸の庇護者として尽くすことで代々の伝統を支えようとした。それらの大志を果たすために、様々な苦難に直面することになり、失意の結婚は多大な借財とそれを返済するための生涯に及ぶ苦

闘の結果となるが、彼女は自らの決断力を信頼していた。彼女の自立心が窺われるのは、従兄ハーバートとの堂々たる不倫と、私生児を産むことよって従来の慣習を侮る勇氣である。たとえアン王妃の宮廷での恵まれた境遇を失うことになると、彼女は自らの散文ロマンスの持つ風刺的洞察力を武器にして宮廷に潜む墮落腐敗と偽善とを暴露した。醜聞事件のため宮廷生活から遠のいたロウスは、国王の寵愛・出世栄達を得るために、陰謀渦巻く王宮の活劇を、自らの経験を基にして巨大なパノラマに仕立て、出版された第一部約三五万語、第二部約二四万語の大長編作品に結実させた。家父長制に守られた男性優位社会で、このように自由奔放に生きた女性がかつていたことに思いを致しつつ、彼女の作品を読むことは、一興であろう。

(メアリ・ロウスの伝記的事実についての情報は、Virginia Blain, Patricia Clements & Isobel Grundy eds., *The Feminist Companion to Literature in English*. London: B. T. Batsford Ltd., 1990, p.1191, <Mary Wroth>の項目と、非常に優れた概説“Introduction” in Josephine A. Roberts ed., *The Poems of Lady Mary Wroth*. Baton Rouge: Louisiana Univ. Press, 1983, pp. 3-40; Rosalind Miles, *Ben Jonson: His Life and Work*. Routledge & Kegan Paul, 1986, pp. 92-3 に主として負ってゐる。)



レディ・メアリ・ロウス
(Lady Mary Wroth 1587? - 1653?)



サー・フィリップ・シドニー
(Sir Philip Sidney 1554 - 1586)



二人の生家 Penshurst Place